

来たる9月9日は重陽の節句です。陽数(奇数)のうち最大の数である9が重なる日であり、「陽が極まって陰を生ずる」という陰陽思想の考え方から、厄除けが必要とされました。重陽の節句に邪気を祓うために飾るものに茱萸袋があります。どのような由来があるのか調べました。

注) 茱萸袋は茱萸囊とも書き、しゅゆのふくろ・ぐみぶくろ・しゅゆのうなど複数の読み方がある。

節句人形

素
村
な
ぎ
も
ん

有職造花の「茱萸袋」(大木素十氏作)

重陽の節句の飾り物・茱萸袋

重陽は中国から伝わった五節句の一つである。古代中国では重陽の日に高いところに登り、菊の花を浮かべた菊酒を飲み交わし、不老長寿や無病息災を祈る風習があったが、茱萸袋も重陽に欠かせないものだった。

茱萸袋とは茱萸の実を乾燥させたものを詰めた香袋のようなもので、その歴史は古く、後漢の頃には既に茱萸袋を身に付けて辟邪(=魔除け)とする風習があった。三国時代から西晋にかけての武将・周処が著した『風土記』には、茱萸の実を頭に挿して悪気を避ける風習があったことが

記され、後の唐代に入ってから詩人・杜甫が重陽の日に頭に茱萸を戴き厄除と長寿を願う人々の姿を詠んでいる。

重陽は日本にも奈良時代に伝わった。日本では中国の風習に倣いつつ、平安時代より、「菊の被綿」のような日本独自の風習も生み出された。また、宮中では5月5日の端午の節句に菖蒲が下賜される習わしだった。これを御帳の東の柱にかけておき、9月9日になると赤い絹の袋に菊と茱萸を挿した茱萸袋にかけかえた。

強い香りと赤い色で魔を除ける

では、なぜ茱萸が魔除けに使われたのか。日本では茱萸に「ぐみ」の読みがあてられた。日本でグミというと、グミ科グミ属の植物のことを指す。国内には15種類のグミが自生し、赤く丸い実は食用とされる。しかし、中国で用いられた茱萸は日本のぐみとは違い、山椒や花椒に似た香りを持つミカン科の植物・呉茱萸だと思われる。呉茱萸は中国中南部に分布し、特有の強い香りを持ち、秋になると丸く房のように赤い小さな実をつける。実は生薬であり、その薬効は中国最古の薬物書『神農本草経』

にも記され、現在も漢方に用いられる。重陽伝来時の日本には呉茱萸が自生していなかったため、呉茱萸に似た山茱萸やグミと混同された。茱萸袋が魔除けとされたのは、本来中国で使われた呉茱萸が、強い香りと薬効を有し、さらに邪を避けるとされた赤色の実を持っていたからだった。



菊の被綿

監修 林直輝さん(日本人形文化研究所所長) / 参考文献 許曼麗『重陽の詩歌：詩語、歌語と行事をめぐって』(2005年、慶應義塾大学日吉紀要) 『茱萸』と「ぐみ」 寺井泰明(2008年、桜美林大学紀要) 武田薬品工業(株) 京都薬用植物園サイト (<https://www.takeda.co.jp/kyoto/area/plantno165.html>)